

### 当院における $\beta$ 溶連菌検出状況と劇症型溶血性レンサ球菌感染症の 1 症例

◎小林 瑤子<sup>1)</sup>、木村 東子<sup>1)</sup>、加藤 邦子<sup>1)</sup>  
山形市立病院 済生館<sup>1)</sup>

【はじめに】劇症型溶血性レンサ球菌感染症(STSS)は感染症法に基づく五類感染症(全数把握)であり、発症から短時間で播種性血管内凝固症候群(DIC)や臓器不全などの重篤な病態へ進行し致死率が高い。STSS の起炎菌となる  $\beta$  溶連菌の検出状況と経験した 1 症例を報告する。

【対象・方法】2014 年 1 月から 2024 年 7 月までに分離された  $\beta$  溶連菌を対象とした。但し 2024 年は 1 月から 7 月までの統計である。Lancefield 分類はラテックス凝集反応により A 群(GAS)、B 群(GBS)、C 群(GCS)、G 群(GGS)、ABCG 以外に分類した。調査内容は、①全検体における年間検出率(年間検出数/年間検体数)、群別内訳、②検体材料別年間検出率(検体材料別年間検出数/各検体材料年間検体数)、群別内訳、③年代別群別検出数(全検体、材料別)とした。

【結果】①年間検出率は 2020 年の 5.9%(609/10300)が最も高く、次いで 2024 年が 5.7%(371/6507)であった。群別内訳として 2024 年の GAS は 24.3%(90/371)であり、前年までの平均 9.9%の 2 倍以上となっていた。②上咽頭粘液の検出率は 2024 年が 5.9%(35/595)で最も高く、内訳は GAS が 94.3%(33/35)であった。扁桃腺・咽頭粘液の検出率も 2024 年が 33.8%(51/151)で最も高く、内訳は GAS が 62.7%(32/51)であった。膿における検出率は 2024 年が 19.6%(46/235)で最も高く、内訳は GAS が 37.0%(17/46)、GGS が 41.3%(19/46)であった。③全検体において、GAS は 0 歳から 5 歳がやや多く、幅広い年代に検出されたが、GBS(妊婦を除く)、GGS、ABCG 以外は 60 代以降に多かった。特に膿では GAS は年代別で顕著な差がなかったが、GBS と GGS は 50 代以降で増加していた。

【症例】60 代女性。X-1 日発熱、右足の腫脹、

疼痛で前医を受診し、X 日肝障害、右足の水疱化と皮下出血により当院へ紹介された。来院時の採血で高度炎症反応、肝・腎障害を認め、DIC と診断された。右足患部は壊死性筋膜炎と推察された。経過が急速かつ多臓器障害と敗血症性ショックを伴い STSS が疑われ、TAZ/PIPC と CLDM の投与が開始された。入院時に提出された膿培養より *Streptococcus pyogenes*(GAS)が検出され、血液培養は陰性であった。STSS と診断され X+5 日に届出となった。起炎菌同定後 TAZ/PIPC を ABPC へ変更し足を切断することなく救命された。

【考察】2023 年夏季より全国的に小児の GAS 咽頭炎が流行し、当院においても 2024 年は上咽頭粘液、扁桃腺・咽頭粘液の GAS 検出率が高かった。膿由来の GAS 検出率が高い要因として、GAS 咽頭炎の流行により溶連菌に暴露する機会の増加が先行していると考えられる。STSS は起炎菌として GAS が最も多いとされ、次いで GGS と GBS が続く。当院では膿由来の GGS と GBS の検出数が 50 代以降で多く、蜂窩織炎の起炎菌として検出されているため注意する必要があると考える。STSS は推定感染経路の一つに創傷感染があるが、本症例も足からの感染と推察された。来院当初から STSS の可能性が考えられ、培養結果の報告後速やかに届出が行われた。STSS の可能性や届出の必要性を感じた際は、主治医に情報提供し、感染対策チーム(ICT)でも協議することでスムーズに届出できるように貢献していきたい。

【まとめ】溶連菌検出数の増加は STSS 発症の誘因の一つと考えられるため、検出傾向を今後も注視していく必要がある。

連絡先 023-634-7117